

# 道東沿岸に生息するウニ

増殖部 富田 恭司

今から約三〇億年前に、この地上に生物が現れました。ウニは約五億年前の古生代カンブリア紀に、すでに現れていたことが化石から証明されています。人類が現れたのが約三〇〇万年前ですから、人間より遙か昔に、すでに立派なウニが出来ていたこととなります。

このように、ウニは何億年も前の海で栄え、今でも熱帯から寒海まで、そして潮間帯から数千メートルの深海まで広く分布し、栄えている珍しい動物です。

ウニは棘皮動物、すなわちトゲ、カワ動物です。棘と皮の中から卵巣等の生殖巣と、腸等の消化管を取り出すと、中は空っぽになっ てしまいます(第一図)。このため、ウニは「色気と食い気だけの動物」とよく言われます。

ウニは世界中何処の海でも見られますが、すべて海産で、淡水や陸上で生活するウニは居ません。世界中でウニは約八五〇種、そのうちおよそ二〇〇種が日本の近海に生息していると言われています。北海道近海には一三種のウニが生息しているとされていますが、

道東の根室海峡と襟裳岬以東の太平洋沿岸には、次の五種しか生息していません。

## エゾバフンウニ

通称ガゼと言われ、北海道沿岸全域と東北地方沿岸の潮間帯から浅海に分布し、道東沿岸の岩礁地帯では、何処でも普通に見られます。道東では、この種だけが漁獲の対象となります。

道東では、この種だけが漁獲の対象となつていますが、近年資源の減少が著るしく、その増殖対策に頭を痛めています。昭和五〇年に十勝、釧路、根室支庁管内のエゾバフンウニの漁獲量は、むき身で五三四トンで、全道の五二%を占めていました。しかし、昭和五九年には二六五トンで、一〇年前の半分以下になっていきます。その中でも、特に釧路支庁管内の減少が著るしく、昭和五〇年は二三八トンでしたが、昭和五九年は五四トンと $\frac{1}{4}$ 以下になってしまいました。このため各漁協では人工種苗の放流を検討しており、一部で人工採苗を実施し始めた所もあります。

この種の産卵期は、道東で六一〇月と長いのですが、七一八月に産卵する個体が多いようです。

## キタムラサキウニ

通称ノナと言われ、体は大型で暗紫色を呈し、棘は長い。北海道では宗谷岬と襟裳岬を結ぶ西側の海域で、エゾバフンウニの生息水深が、それより深い所に生息し、漁獲の対象となつていきます。しかし、流水の来るオホーツク海、根室海峡、道東太平洋沿岸と水が冷たくなるにつれ、その生息数は減少します。特に襟裳岬東側の太平洋沿岸では極めて数は少なくなります。例えば、厚岸湾とその周辺の水深二一〇mの所で、毎年ウニの資源調査を実施していますが、採集されたキタムラサキウニは、六年間で一個体だけです。

この種の産卵期は、日本海沿岸で九一〇月です。コンブ等を好んで食べ、日本海沿岸の磯焼け原因の一つとされています。

## チシマオオバフンウニ

この種については、北水試月報四〇(七七)で報告しました。体は暗緑色で、棘はエゾバフンウニよりやや太く、長い。ペーリング海、カムチャッカ半島、千島列島の水深〇一五〇mに分布し、日本では昭和五七年に厚岸湾で初めて確認されました。その後、根室から釧路までの太平洋沿岸で次第に目に付くようになり、今年には広尾町の沿岸でも、殻径二五mmの稚子が一個体採集されました。この種の生息水深は、エゾバフンウニとはほぼ同じで、コンブ類を好んで食べるため、今後さらに増え

て来ると、エゾバフンウニと餌をめぐっての競合が心配されます。

身(生殖巣)はエゾバフンウニより白っぽく軟らかい。産卵期は四ノ六月頃と推測されています。

サンリクオオバフンウニ(オオバフンウニモドキ)

この種は、釧路沿岸から日高沿岸の水深二〇ノ一〇〇m前後の所に多く生息しており、刺網、桁網、ツブ籠、カニ籠等で普通に漁獲されます。体はやや扁平で淡褐色か淡緑色を呈し、細く短い棘が密にあり、さらにやや太くて長い棘が疎らにあります。東大の重井先生に送って同定して戴いたところ、サンリクオオバフンウニと言う種で、樺太、千島、北海道、三陸沿岸の浅海から二〇〇mの所に分布しているとのことでした。

釧路の市場等で、六ノ八個で三〇〇円前後で売っているのがこの種です。沖に生息するわりに身は意外と奇麗な黄色をしています。しかし、お世辞にも美味とは言えません。道東のある漁協から、エゾバフンウニの資源が少なくなったので、この種を海藻の多い浅い所に移植しては、と相談を受けましたので、胃内容物を調べてみました。その結果、雑食性ですが動物の死骸が多く見られました。しかし、実験室でコンブを与えると二、三日で食べだし、身もいやな臭いがなくなりました。

浅海に移植してみないとわかりませんが、沖に出て行く事も考えられます。

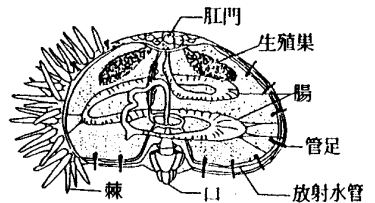
釧路西部地区水産技術普及指導所の協力で、この種の産卵期を調べてみますと、真冬の表面水温が氷点下となる一ノ二月に産卵していることが明らかになりました(第二図)。ウニの中にも、北海道近海で獲れるタラ科の魚(スケトウダラ、マダラ、コマイ等)のように、氷点前後の冷たい水に産卵し、稚仔を発生させる種もいるのです。

### ツガルウニ

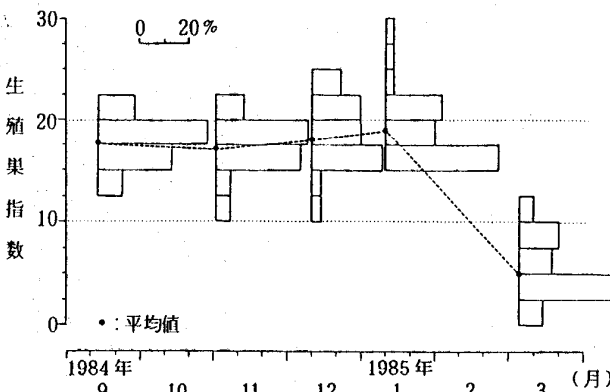
体は扁平で淡褐色、イボ(棘の付け根)がわずき色を呈するのが特徴で、棘はやや太く長い。日本海やオホーツク海で、カレイ刺網、ホタテ桁網に普通にかかります。近年、ホタテガイで有名になった猿払海域のホタテガイ漁場では、昭和三五ノ四五年頃このツガルウニが優占種で、一曳に数千個も入った時がありました。この種は根室海峡で数は少なくなり、釧路沖では極めて少なくなります。丁度日本海やオホーツク海でツガルウニが生息する水深帯に、釧路沖ではサンリクオオバフンウニが生息しています。

産卵期は二ノ四月頃で、身の色は悪く、あまり食用とはされません。

以上の五種が根室海峡、根室ノ類似の太平洋沿岸のウニ調査や、いろんな漁業の混獲物の中で見い出されたウニです。



第1図 ウニの内部構造



第2図 サンリクオオバフンウニの生殖周期 (白糠沖水深30~50m)